本果院日朝聖人に関する研究（四）

――書写御本尊の伝承と真蹟について――

原井慈鳳

目次

一　はじめに
二　本果院日朝聖人御本尊の伝承と特徴
(一)　永享元年　南之坊所蔵本尊
(二)　永享八年　蓮華寺所蔵本尊
(三)　永享九年　本国寺所蔵本尊
(四)　永享九年　本蓮寺所蔵本尊
(五)　享徳二年　立正寺所蔵本尊
(六)　享徳三年　蓮静寺所蔵本尊
(七)　享徳四年　蓮静寺所蔵本尊
(八)　享徳四年　蓮静寺所蔵本尊
(九)　長禄四年　東之坊所蔵本尊

三　行学院日朝聖人真蹟とⒶⒷ二本尊の問題点
㈠　Ⓐ嘉吉三年　身延山所蔵本尊の問題点
㈡　Ⓑ永享八年　富士市妙永寺所蔵本尊の問題点
㈢　Ⓒ文明三年　三島市本覚寺所蔵本尊（真蹟表示）
㈣　Ⓓ文明四年　京都市妙伝寺所蔵本尊（真蹟表示）
四　本果院日朝聖人真蹟とすべき本尊の根拠と課題
㈠　Ⓐ嘉吉三年　身延山所蔵本尊の筆者
㈡　Ⓑ永享八年　富士市妙永寺所蔵本尊の筆者
五　結　語

一、はじめに

本果院日朝聖人（一三九二～一四六六）書写御本尊は今日同師の開創寺院に伝承される例が多いが決して多数とは言えない。授与者、書写地、伝承の由来が明らかなものがある一方、由来は不明で後年に奉納されたものがある。

これらの御本尊の書写の年代は永享元年（一四二九）から長禄四年（一四六〇）まで約三十年に及ぶ。同聖人（以下、本果朝師と記す）の年代による筆蹟の変化は当然考えられるが真蹟考察のために、(a)首題の特徴、(b)勧請（図顕）諸尊表記の特徴、(c)讃文の引用、経文の特徴、(d)署名花押の特徴、(e)授与者、書写年月日の表記（以下

「年記」と記す）の特徴、(f)文字、筆法の特徴の検討を試み、また地誌的、文献的、歴史的背景をも考慮して比較してみたい。

私見では本果朝師の書写御本尊でその筆法も定まりその特徴が明確になって来るのは享徳二年（一四五三）以後の書写と考えられ、それ以前の本尊は慎重に見なければならないと思われる。

更に行学院日朝聖人（一四二二～一五〇〇）が伊豆の宇佐美に生誕され後に身延山久遠寺第十一世、一致派に於ける室町期の代表的教学者となるが三島本覚寺に於て得度し、京、鎌倉に遊学するなど本果朝師と四十余年の同時代を過ごされた事が明らかである。（以下、行学朝師と記す）

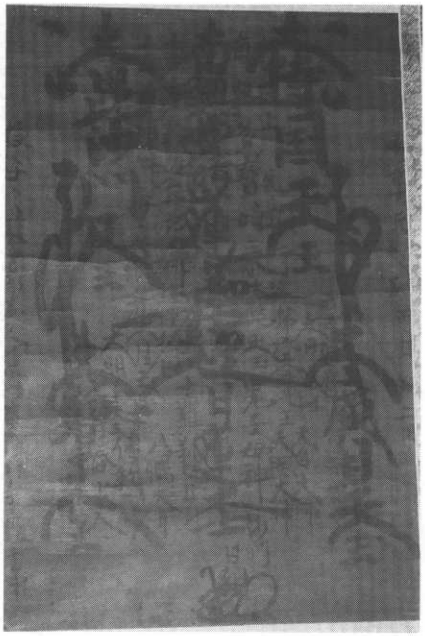
従って両師は後年混同される事例があり、両師の書写本尊についても例外ではない。唯多くの比較点で明らかな特徴があり識別して混同を避けなければならない。

今日伝存の本果朝師御本尊の特徴を明らかにし、更に今回新たに検討すべき二本尊を取上げその真の筆者についても考察をしてみたい。

二、本果院日朝聖人御本尊の伝承と特徴

(一) 永享元年　南之坊所蔵本尊

当本尊は沼津市、法華宗大本山光長寺塔頭南之坊所蔵で永享元年（一四二九）の年記がある。近年昭和五十五年同坊檀家より奉納された一幅である。



永享元年南之坊所蔵本尊

首題は筆勢があり「華」「經」の文字の大きな広がりが際立つ。

勧請諸尊の内四天王、不動、愛染の二明王の表記は更に大きく、「大」「天」の文字は大きく広がる独得の筆法である。「大廣目天玉」の「玉」は点があり他の四天王には「王」として点を付さない。大増長天王は「大増天王」と「長」の字が欠ける。

首題の下に「日蓮大士」と書写され首題左下「傳教大師」の更に左側に「日春上人」と記される。

讃文は「末法相應　大漫荼羅也」とある。

署名花押は「沙門日朝花押」。確実な筆蹟の他例と比べ特徴に決定的な指摘はできない。

左端に記される授与者に「授与之駿東郡北久原村蓮静寺檀方中」とある。

年記は右端に永享元己酉正月十二日（一四二九）と見える。北久原（ほっくばら）は確かに今日の蓮静寺の旧地（今日の御廟所）である。駿東郡は駿河国の東部に位置する。「駿河郡」から「駿東郡」への改称の時期は不明であるが研究者の見解によれば戦国期とされる。「駿東郡」の郡名の初見は天文二十年（一五五一）九月二十一日、定輪寺宛今川義元安堵判物とされている。[1] また「北久原村」の「北久原」は戦国期、天文十一年（一五四二）九月二十六日、北條氏康判物写に見える。[2] 村名は江戸期、慶長年代以降、明治二十二年までの村名である。

これらを考慮すると、永享元年時、同郡名は初見より百二十年以上遡り、村名は百六十年以上遡ることになる。彼此考慮して更に検討を要す。

(二) 永享八年　蓮華寺所蔵本尊

当本尊は静岡県長泉町、蓮華寺（光長寺末）所蔵である。開創は本果朝師になる古刹である。

当本尊の首題は大きく筆勢が有る。そしてこの首題と特徴を同じくする筆蹟が存在する。それは御殿場市、蓮静寺所蔵、本果朝師による『法華宗本門弘經抄神力品下』の写本の裏表紙、見返しに残される題目の墨蹟である。首題の脇に「南無釈迦牟尼佛」、「南無多寶如來」、首題の下に「日蓮在判」とある。この筆蹟は本果朝師真蹟と判断して間違い無いと思われる。（一二八頁写真参照）

勧請諸尊は十界が整然と配され、四天王、二明王も骨太な筆法にて書写される。首題の下に「日蓮大聖人」が勧請される。但し多寶如来の「寶」の字が欠ける。

讃文の引用、経文の特徴は、右上より「有供養者福過十号」右中程より「讃者積福於安明」、左上より「若悩乱者頭破七分」左中程より「謗者開罪於無間」と見え、光長寺、二十八紙大漫荼羅の讃文に見える引用である。

署名、花押は本尊左下部に「沙門日朝花押」がある。「沙門」の文字も蓮静寺、『御聖教』写本中に複数残る署名花押に類似しており、日朝の「朝」と花押部分が重なる特徴も同様である。

授与者は見えず、年記は本紙左端に辛うじて残る文字「丙辰　六月」により本果朝師ご在世年の永享八年（一四三六）と推定される。永享七年（一四三五）は本果朝師上洛の年と考えられ、書写年代はその翌年となる。

当本尊表装の記録が本尊の裏に記され、明治十七年四十二世日精師の記録である。奉納主は「御厨阿多野新田

永享八年蓮華寺所蔵本尊

喜多長平治」と見える。この喜多氏とは既述の蓮静寺所蔵、『御聖教』写本、本果朝師書写、真筆署名のある外題は『法華宗本門弘経抄百十三帖内第百三帖　神力品下五帖内第五』であるが、その原本の裏表紙左下に「施主　喜多長右衛門」と見える。

蓮華寺御本尊施主の喜多長平治氏の住所、「御厨阿多野新田」は酒匂（さかわ）川支流、須川右岸に位置し江戸期から明治二十二年（一八八九）までの村名である。[3] 江戸期に当本尊は奉納されたと考えられ、喜多長右衛門はその先祖か、一族の先祖と考えて間違いはないだろう。

文字の特徴は首題の項で述べた所であるが、筆勢があり特に「蓮」「經」「羅」等に本果朝師の筆法が現われている。

㈢　永享九年　本国寺所蔵本尊

当本尊は本果朝師開山になる御殿場市神山本国寺（光長寺末）所蔵の一幅である。伝来は詳かではないがこの一幅は楷書に近い明確な書体で書かれている。

首題は大きく「經」の字は広がる。但し本果朝師の特徴の具体的部分の指摘には躊躇する。

勧請諸尊は四天王、二明王が書写され二佛、四菩薩を主体として「文殊普賢大士」「薬王弥勒尊」「鬼子母神天台傳教師」「十羅刹女三十番神尊」と表記され、尊称表記の特徴となっている。首題の下に「日蓮大士」その両脇は右に「日春上人」左に「日法上人」が勧請される。文字に本果朝師の特徴は指摘できないが光長寺系統の本尊形式である。

讃文は日春日法上人の両脇にあり右に「末法相應之」左に「大漫荼羅也」とある。南之坊所蔵本尊と同様である。

署名・花押は首題の下、日蓮大士の下、中心位置にあり、「日朝花押」。署名「日朝」の文字に花押の重なる部分は少ない。文字の特徴として「朝」の字を「朝」とするが行学朝師の署名の「朝」が「朝」となる例がある。

永享九年本国寺所蔵本尊

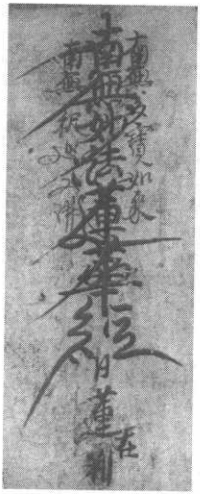
署名右上に「青蓮妙院」と墨色の異なる文字が見えるが他に例はない。花押は南之坊所蔵本尊と類似する。

授与者名は本尊左端中程より上から「授与之優婆塞蓮壽日堅」とある。年記は本尊右端、中程より上から「永享九丁巳太歳正月佛誕日」（一四三七）とある。

文字の特徴は「蓮」「羅」「玉」等、本果朝師の定まった筆法とは異なる。年代による差異であるか否かは更に研究する必要があろう。

(四) 永享九年　本蓮寺所蔵本尊

永享九年本蓮寺所蔵本尊



蓮静寺蔵
『御聖教』写本首題

当本尊は本果朝師開山になる静岡県小山町湯舟　本蓮寺（光長寺末）所蔵になる。当本尊の伝来は詳らかではないが小幅であり祈祷に用いられたものか讃文に特徴を見る。

首題は大きく「無」と「華」の横に引く一画が特に長い。「無」の筆法は南之坊本尊に近く真蹟の筆法と異なる特徴があるが、首題全体の印象は蓮静寺、本果朝師『御聖教』写本の裏表紙の首題に近く「蓮」の字の之繞（しんにょう）はその特徴を表わしている。

勧請諸尊は二明王と首題の下方左右に「大日月天王」と「第六天魔王」その下方に図顕されるのが「鬼子母

神」「天照大神」「十羅刹女」「八幡大菩」、首題の真下に「日蓮在御判」、不動・愛染の梵字は墨色が薄く讃文と重なる部分がある。

讃文は首題右の上より二行に「諸餘怨敵、火不能燒」「明練方薬　善治衆病」、首題の左上より二行に「安樂産福子　開眼」「皆悉摧滅、水不能漂」とある。「開眼」の文字は他の本果朝師本尊にはなく讃の文意から祈祷用と見える。

署名、花押は中心の下部に在り「日朝」と記された文字と花押とは殆ど重ならない。但し、花押部分は本紙の欠損があり補筆の可能性もあるため慎重に見たい。

授与者は「授与之酉ノ年女性」とあり、年記は「永享九丁巳九月十二日」（一四三七）とある。当本尊は先師により永享元年（一四二九）書写の本尊とされて来たが、丁巳は永享九年であり本紙の部分的欠損から「元」と読まれ伝来されたと思われる。

文字の特徴は、署名、花押には御真蹟の筆法が見出せず、本果朝師の特徴を示す「蓮」の文字がある一方、別の特徴のある文字も多い。二明王の墨色が薄い特徴は、他の本果朝師真蹟にも例があり偶然か意図あるものか不明である。更に検討を要す。

㈤　享徳二年　立正寺所蔵本尊

立正寺は山梨県、甲州市　勝沼休息の日蓮宗寺院であるが、寺記によれば天正十九年（一五九一）まで大本山光長寺と両山一寺として八品門流の甲駿の牙城であった。[4] 武田勝頼の時、織田信長、徳川家康の連合軍の武田氏攻略に遭い、寺域は戦場となり戦火に見舞われた伽藍は天正十年（一五八二）三月三日灰塵に帰した。同年六月

享徳二年立正寺所蔵本尊

二日、京都「本能寺の変」は余りにも有名であるが当宗にとり甲斐国、駿河国にても莫大な損失を蒙った大災禍が有った事はあまり知られていない。この時朝師造営の七堂伽藍、多くの宝物と共に本果朝師に関連する多くの史料が失われた事は想像に難くない。その後、立正寺復興の過程で光長寺と門流分裂という両山にとり苦難の歴史を辿る事となった。

その立正寺は宗祖を開山とし『立正安国論』講説の地、二祖日法聖人、三祖日乗聖人として由緒がある。立正寺の今日の寺域と焼失前の大伽藍、十二坊を整え在住四十八年、中興開基と称されるのが同山第七祖本果朝師である。

当山に所蔵される本果朝師の御本尊一幅、年記は享徳二年（一四五三）、聖人六十一才の御書写である。災火に罹り乍ら奇蹟的に伝承されたものである。

首題は堂々として筆勢は雄渾。骨太の文字で御本尊書写の形式が定った観がある。筆法は蓮静寺所蔵、本果朝師写本『御聖教』裏表紙見返しの首題と同様の特徴を持ち、「蓮」の字「經」の字はそのまま特徴が拝される。

勧請諸尊は十界、四天王、二明王（墨色は薄く見える）、首題の下に「南無日蓮大聖人」、その右に図顕される「鬼子母神」「天照太神」左に「十羅刹女」「八幡大菩薩」、この形は以後の御本尊も同様であり、永享八年、蓮華寺御本尊に既にその形を見る事ができる。

讃文は安立行菩薩左側下方に「若悩乱者頭破七分　有供養者福過十号」、御本尊右下方に「佛滅度後二千二百三十余年之間一閻浮提之内未曽有大漫荼羅也」、典型的な本果朝師本尊の讃文の形と言えよう。

署名花押は「日蓮大聖人」の下、「日朝花押」、「朝」の字と花押は多くの部分で重なり合う。蓮静寺所蔵、本果朝師写本の複数の署名花押と同様の特徴を有するものである。

授与者、年記は「八幡大菩薩」の左に「松子丸授与之」とあり、本尊左端下方に「享徳二年大才癸酉三月六日」（一四五三）とある。松子丸なる人物とは立正寺二十六世巳心院日退師の記した『甲陽休息山立正寺之來歴』（宝永三年五月）中にその名が見え「彼の旧寺ヲ本立正寺ト云フ于茲松子丸亀壽丸ト云フ兒子アリ」とある。[5] 日朝師が新たに建立した「新立正寺」の旧地、旧寺を「本立正寺」と称した事が知られるが[6]その旧寺に住した修行僧又は朝師の学室の子弟と判断される。「新立正寺」が災火に焼失の憂き目を見たのに対し、旧寺「本立正寺」側にこの本尊が残された可能性が強いと推定される。当寺二十六世日退師はこの御本尊を見ていた事になる。

因みに「亀壽丸」の名は休息山立正寺所蔵、光長寺七祖日建師書写現存御本尊に授与者としてその名が残り、立正寺の子弟に光長寺貫首が本尊を与え、これらの史実を見ても「両山一寺」とされる旧記を裏付ける史料と言えよう。

文字の特徴で際立つものは「蓮」「經」「羅」「授」等であり独得の筆法と言う事ができる。正に本果朝師の特徴を具備する一幅と拝される。

㈥　享徳三年　蓮静寺所蔵本尊

享徳三年蓮静寺所蔵本尊

当本尊は御殿場市、本門法華宗蓮静寺所蔵になる。蓮静寺は往時光長寺末として本果朝師開創の古刹であり、富士山宝永噴火の後、現地に寺域を移した歴史がある。本果朝師本尊三幅を宝蔵し今日に至る。

首題の特徴は堂々と大きく迫力がある。「蓮」と「経」は正に本果朝師の筆法であり、文字の太さに余り変化のない骨太の文字。光明点は敢て筆勢を止めている感がある。

勧請諸尊は上段仏部は常の如く中段菩薩、聲聞、縁覚、諸天が左右各々五行に書写され、下段右に「転輪聖王」「阿修羅王」左に「大龍王」「阿闍世王」、宗祖の右に「鬼子母神」「天照太神」左に「十羅刹女」「八幡大井」が図顕され、十界を網羅している。首題の下に「南無日蓮在御判」とある。不動、愛染二明王の墨色はやはり薄墨に見える。

讃文は仏部右端上方より「若悩乱者頭破七分　有供養者福過十号」、仏部左端上方より「讃者積福於安明　謗者開（罪）於無間」。右端下方に「仏滅度後二千二百三十余年之間一閻浮提之内未曽有大漫荼羅也」。

署名花押は「日蓮在御判」の下、「日朝花押」であり、「朝」の一字は殆ど花押と重なる。典型的な署名花押である。

授与者は「八幡大井」の左側に記され、「久速山本」「立正寺」と二行に書かれる。「久速山」と「本」の字は「立正寺」と筆の穂先の割れのままに続いているので同時に書かれた寺名である。「本立正寺」と称される寺の事は既に記した所なので詳細は省くが本果朝師が真言修験の旧寺伽藍の地から新たに「立正寺」を引移して「新立正寺」を造営し旧寺域に残された寺は「本立正寺」と称された。その寺の事と拝される。この寺は後に「本立寺」と寺号を改めた。

年記は「享徳三年大才甲戌七月十日」（一四五四）と本尊の左端下方に記される。「七月」は「十月」とも見えるが筆の穂先の割れの方向を見ると七月と見るべきかと思われる。前項、休息立正寺所蔵本尊の翌年の書写となる。文字の特徴を見ると、立正寺所蔵本尊と同様であり本果朝師真蹟の特徴を具備して疑いの余地はない。

㈦　享徳四年　蓮静寺所蔵本尊

当本尊は前例と同じく蓮静寺所蔵である。但し本紙上半部に欠損があり中央部に剥落、更には折れによる欠損がある。下半部は折れ損以外相当部分の文字が表装の仕立てにより拝読できるのでその価値は決して失われてはいない。

首題の文字の全体に対する比率は必ずしも大きくなく大部分が失われているが「蓮」の之繞（しんにょう）の部分、「經」の光明点の部分が残り特徴は明確に拝される。

勧請の諸尊は前例と同じく十界諸尊が網羅された重要な本尊である事が知られる。首題の下に「南無日蓮大聖人」が勧請され、二明王の梵字は大きく墨色は十界諸尊と同じでありこの場合薄墨ではない。

特記すべきは右下段「南無天台大師」の右下に「南無日春聖人」と勧請され、左下段「南無伝教大師」の左下

享徳四年蓮静寺所蔵本尊

に「南無日法聖人」と勧請されている。光長寺同時二祖、日春、日法両師である。これは重要な意味を有し、立正寺貫首である本果朝師が光長寺の両祖を勧請する事は光長寺を主体とする御本尊のご染筆であり、立正寺旧記に見る先例のように両山一寺の関係を拝する事ができる。更には後に記すように、蓮静寺二祖に授与された当本尊の意味は蓮静寺が光長寺末寺との意図を有している。

殊に朝師署名花押の右上に「南無日隆聖人」の文字が見え、本能寺、本興寺の開山日隆師を勧請されている事に注目したい。隆師ご遷化の十年以前の記録であるが「聖人」号を以て書写された。既述の通り隆師の著述『御聖教』を書写されその一部が蓮静寺に伝わるが、両師が出会われたとされる永享七年（一四三五）より二十年の歳月が流れ当本尊には光長寺の歴史とその法流、八品門流の伝承の意図が見えよう。

讃文は、中段右端に「□者積福於安明　謗者開罪於無間」、中段左端には「若脳乱者頭破七分　有供養者福過十号」とある。下段右端より内側へ五行に亘り「佛滅度後二千二百三十余年之間　一閻浮提内未曽有大漫荼羅也」とある。定まった形の讃文である。

署名、花押は「日朝」の「朝」と花押が重なり中央に折れによる欠損はあるものの花押の形は十分に本果朝師と推定できる。

授与者は署名花押の左下に「日明授与之」と見える。日明師は本果朝師の後を嗣ぎ蓮静寺第二祖となった。[7]年記は本尊左端下方に「享徳四年大才□亥三月廿四日」（一四五五）と見える。前例の本尊の翌年のものであり日明師が当山に遺され伝来したものと推定される。

文字の特徴を見るに、本紙に折れや欠損部分が多く認められるが骨太の筆法で素朴な文字群は本果朝師の特徴をよく伝えている。

(八) 享徳四年　蓮静寺所蔵本尊

当本尊も蓮静寺所蔵のものである。時代による本紙の劣化も少なく堂々とした一幅である。

首題は比較的控え目に本紙上部に収まる大きさで書かれ骨太、素朴。上部に少し折れ損があるが首題の光明点は仏部の一部に懸る外は勧請諸尊と文字が重ならない。

勧請諸尊は上段仏部、中段左右に六行ずつの諸尊、首題の下に「南無日蓮大聖人」下段は右に「鬼子母神」「転輪聖王」「阿修羅王」左に「十羅刹女」「大龍王」「提婆達多」「阿闍世大王」、神祇人師として右側に「天照太神」「南無龍樹菩薩」「南無天台大師」「南無日法聖人」　左側に「八幡大菩薩」「南無天親菩薩」「南無妙樂大師」「南無傳教大師」が図顕される。

四天王、二明王は常の如しであるが「不動」の梵字の墨色は薄い。勧請諸尊の配列を見ても詳細にまた念入りに書写されている。光長寺同時二祖「日法聖人」が右下方に勧請され、日法師に対する尊崇の意が表わされる。

讃文を見ると、仏部右端より下に「讃者積福於安明　謗者開罪於無間」　仏部左端より下に三行に亘り「若悩乱者頭破七分　有供養者福過十号」とある。なお右端下方に「佛滅度後二千二百三十余年之間一閻浮提之内未曽

享徳四年蓮静寺所蔵本尊

有大漫荼羅也」とあり正に本果朝師の用いる讃文の典型である。

署名花押は「日朝花押」、「朝」の字と花押はやはり重なる。定型化した署名花押で問題なく本果朝師と特定できるものである。

授与者は「沙門日壽授与之」とある。日壽師は蓮静寺に於て第三祖の嗣法となった。[8] 第二祖日明師授与の一ヶ月後の本尊である。伝来の極めて明白なものである。

年記は左端下方に「享徳四年大才乙亥潤四月十三日」（一四五五）とある。

文字の特徴は本果朝師の安定した筆法が見られ各々の文字は疑念の余地はない。

(九) 長禄四年　東之坊所蔵本尊

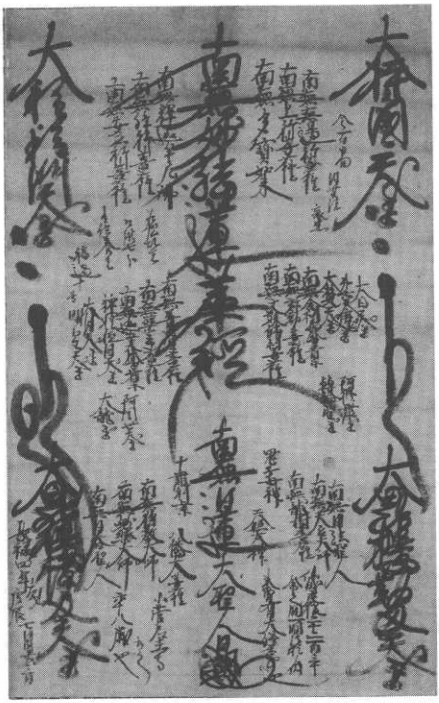
当本尊は大本山光長寺塔頭東之坊所蔵になる一幅である。本果朝師は当坊に於いては第五祖に列せられる。

首題は勢いがあり光明点も長く雄渾な筆致で書写されている。特に經の糸偏は第一角が大きな丸みを帯びる形で本果朝師の特徴を有する。

勧請諸尊は上段仏部が常の如し、中段は左右に六諸尊、下段は左右二諸尊、首題の下が「南無日蓮大聖人」右に「鬼子母神」更に右は龍樹、天台、そして「南無日法聖人」、反対左に「十羅刹女」更に左へ伝教、妙樂、その左が「南無日春聖人」である。日春・日法両師が勧請されるが、同じく両師を勧請する蓮静寺所蔵、享徳四年三月書写本尊(七)と異なり右に「日法聖人」左に「日春聖人」と左右が逆になる。

讃文は右仏部右端に「令百由旬内無諸衰患」、左仏部、淨行、安立行菩薩の下より左へ「若悩乱者頭破七分 有供養者福過十号」、署名花押の右上に「佛滅度後二千二百三十余之間一閻浮提之内未曽有大漫荼羅也」とある。「三十余」の次に「年」は無い。二明王の墨色は他の文字に比してやはり薄い感がある。

署名花押は「日朝花押」、「朝」の文字と花押はほぼ重なる形である。



長禄四年東之坊所蔵本尊

授与者名は無く、署名、花押の左側に、「小菅常在寺書之」とありその左に「六十八才也」とある。年令を記した例は他に無く本果朝師の生年、遷化の年令七十五才が明らかにされる記録である。

「小菅」の地は何処であるかは解明されていないが、鎌倉期『夫木抄』(九)六帖に「甲斐国鶴の郡の板野なるこすけ笠」の記録があり、室町期、宗祇の歌に「板野の小菅(一〇)」と地名が残る。この地は中世「丹波山郷」

と称されていた事も『甲斐国志』にて知られる。栗原筋、大菩薩峠の東側、奥多摩湖に近い。しかし当郷に「常在寺」なる寺が存在した記録は『甲斐国社記・寺記』等にも見られない[11]。当時代、関東、甲信、法華系統で「常在寺」の名は「小立」に見える。「小菅」の文字の意味は仮説ではあるが富士河口湖町、常在寺所蔵『円極実義抄』下巻奥書に見える「都留郡大原庄小館常在寺」の「小館」の意図で書かれたものであったと仮定したら今日の「小立」、富士河口湖町、常在寺の事と判ぜられるのではないかと考える。今日の地名に「小立」の文字が使用されるようになったのは近世後期のことである[12]。

年記は左下部分にあり「長禄四年大才庚辰七月廿三日」（一四六〇）と見える。本果朝師遷化の文正元年（一四六六）十月二十五日を考慮すれば、文正元年七月にて既に七十四才を越えられ、十月にては七十五才とすべきと考える。

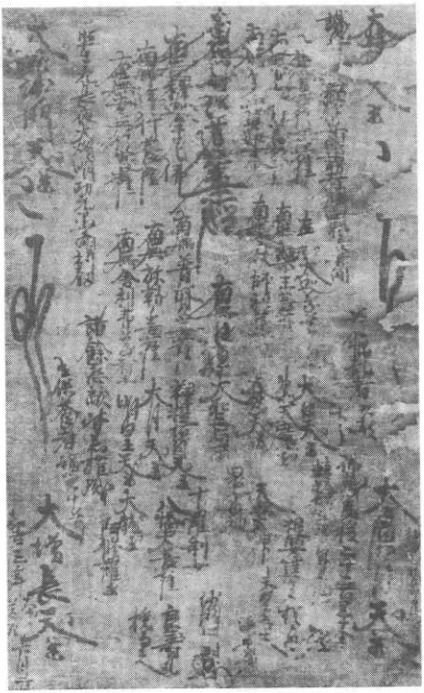
文字の特徴は署名、花押を含め真蹟たる事に疑いはない。

当本尊の伝来は、元の表装軸に墨書が残り嘉永七年（一八五四）、六日市場元照院、廣教院日同師の寄進になる事が記される。六日市場の位置は、元照院の寺名により特定され、明治六年に廃寺になった日蓮宗の寺院の旧地で、今日の御殿場市の一地域に当る。

三、行学院日朝聖人真蹟とⒶⒷ二本尊の問題点

㈠ Ⓐ 嘉吉三年　身延山所蔵本尊の問題点

当本尊は『日蓮聖人門下歴代大曼荼羅本尊集成』（昭和六十一年三月発行）に収録される一幅である。即ち当本の「解説」に「身延山久遠寺所蔵、一一一　日朝上人本尊㈡」とある。京都市妙伝寺所蔵、一一〇　日朝上人本尊㈠と並び掲載されている。その註に「日朝上人（一四二二～一五〇〇）鏡澄、加賀阿闍梨、宝聚院・行学院といい、身延山久遠寺十一世で、身延山中興の祖と称される」と明記される。[13] 両本尊は行学院日朝師真蹟として収録される。



Ⓐ　嘉吉三年身延山所蔵本尊

しかし両本尊の特徴は多くの面で異なる点が見出され、既に指摘して来た所であるが[14]二の項に列記して来た本果朝師の真蹟類と、行学朝師の真蹟とも比較考察が必要と思われる。行学朝師の真蹟例としてⒸⒹの二本尊を後に挙げ異る点を見るが、本果朝師本尊を考察した特徴(a)～(f)の諸点につい

て各々考察する事とする。

(二) Ⓑ 永享八年 富士市妙永寺所蔵本尊の問題点

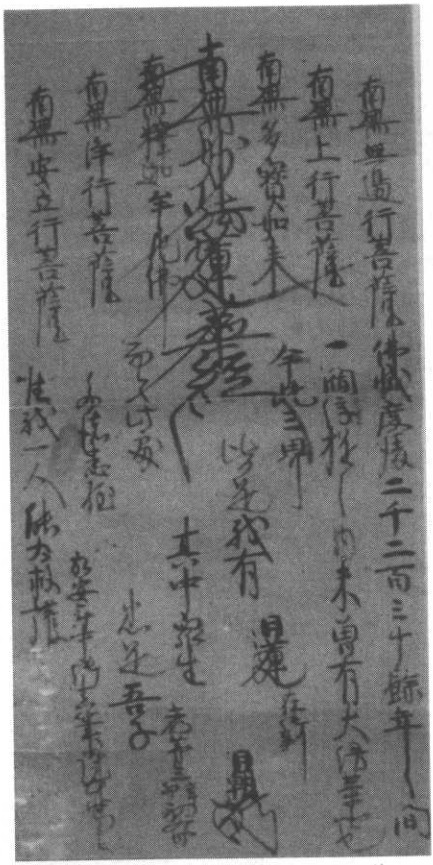
当本尊は富士市日蓮宗妙永寺に蔵される一幅である。当本尊も同寺に於て行学院日朝師真蹟として伝来したと思われる。筆者は昭和末年同寺御会式に御宝物開帳の折、当本尊を確認できた。先ず気づいたのは「日蓮大士」の右脇に「日春上人」左脇に「日法上人」が

Ⓑ 永享八年富士市妙永寺所蔵本尊

勧請されている点である。先ずは両師が光長寺同時二祖聖人とすると光長寺系統の御本尊ではないかと推測した。その時写真撮影を許され保存したまま年月が過ぎた。そして、法華宗教学研究所に於て平成二十四年発表の期会を得た。平成二十六年再び同寺にて同本尊を確認し、諸点を考察させて頂く事とした。それには本果朝師の諸本尊との慎重な比較が必要であるし、同時に行学朝師の典型的な本尊との比較が必要である。本果朝師本尊を考察する上で基本とした特徴(a)～(f)の諸点について比較考察してみたい。先ずは行学朝師真蹟の特徴をⒸⒹ両本尊について確認しておく事とする。

㈢　Ⓒ　文明三年　三島市本覚寺所蔵本尊（真蹟表示）

三島本覚寺は元天台僧、一乗坊日出師が三島を教化の拠点として応永二十八年（一四二一）に開創した寺であり長禄三年（一四五九）日出師の遷化により弟子の行学朝師が後継となった寺歴がある。詳記は避けるが同寺には行学朝師の信頼すべき真蹟文書が数々所蔵される。その中の一幅が当本尊であり行学朝師の確実な一幅であると言えよう。平成五年六月、筆者は当寺を訪れ、当本尊をはじめ古記録の写真撮影を許可頂いた。因みに、光長寺同時二祖日法師の真蹟断簡と考えられる三行が日出師書写断簡として伝来している事を見出し、平成六年その真の筆者につき発表させて頂いた。[15]



Ⓒ　文明三年三島市本覚寺所蔵本尊

当寺に伝来する行学朝師の本尊の特徴を当時の撮影写真により検討させて頂く事とする。

(a)首題の書写の特徴

首題の七字は他の諸尊より大きく書写されるが比率の差はさほど大きくない。筆致は柔らかく流麗である。「無」の筆法、「蓮」の筆法に独得の特徴が見える。本果朝師とは明らかに異なる特徴である。

(b)勧請諸尊表記の特徴

仏部のみの勧請で（釈迦、多宝、四菩薩）他の諸尊は勧請されない。署名花押の右上部に「日蓮在御判」と書写される。四天王、不動、愛染の二明王も勧請されない。

(c)讃文の引用、経文の特徴

当本尊には讃文の占める部分が五割以上である。

首題の右側から下方へ「今此三界　皆是我有　其中衆生　悉是吾子」

首題の左側から左端にかけて「而今此處　多諸患難　唯我一人　能為救護」

右端中程から下部へ「佛滅度後二千二百三十餘年之間一閻浮提之内未曽有大漫荼羅也」

左側中程より下方に「弘安年中御真筆謹奉寫之」とある。

(d)署名花押の特徴

首題の下方に「日朝花押」　日朝と明らかな署名文字が見え、これと重ならず花押。日朝の「朝」は「朝」の如く書かれる。

本果朝師花押とは明らかに異なる筆致と形状である。（一四七頁写真参照）

(e)授与者、年記の特徴

当本尊の左側最下部に文字抹消の痕跡があり、本紙に少量の傷が認められる。これは京都妙伝寺所蔵本尊にある授与者名の位置である。

年記は署名、花押の左側に「文明第三辛卯初九日」（一四七一）の表記がある。

(f)文字の特徴

最も特徴的な文字は「無」であろう。点の打ち方は独得である。

「經」の光明点が中程で折れる形状。「薩」「日」「朝」も行学朝師独得の特徴がある。（一四二頁写真参照）

(四)　Ⓓ　文明四年　京都市妙伝寺所蔵本尊（真蹟表示）

既に前項で『日蓮聖人門下歴代大曼荼羅本尊集成』所載として示した京都妙伝寺所蔵の一幅であるが、「文明第四壬辰二月日」（一四七二）の年記があるもので、三島本覚寺所蔵本尊の翌年に書写されたものである。両者を比較するとその特徴は一致点が多く、やはり行学朝師の典型本尊とみてよいのではないか。

(a)首題の書写の特徴

骨太の文字でなく流れる筆致。「無」「經」「日」の筆法が独得である。

Ⓓ　文明四年京都市妙伝寺所蔵本尊

(b)勧請諸尊表記の特徴

仏部の勧請が主体。署名花押の右上に「日蓮在御判」とある。

(c)讃文の特徴

三島本覚寺所蔵本尊と全同。位置も類似。

(d)署名花押の特徴

「日朝花押」署名と花押は文字が重ならない。「朝」の字は「朝」と見える。花押の形状も三島本覚寺所蔵本尊及び同寺蔵、行学朝師文書の花押と同様。（一四七頁写真参照）

(e)授与者、年記の特徴

授与者は本尊左下隅に「中坊日仙授与之」とある。署名花押の左側に「文明第四壬辰二月日」（一四七二）と記される。

(f)文字の特徴

三島本覚寺所蔵本尊と同様。

四、本果院日朝聖人真蹟とすべき本尊の根拠と課題

(一) Ⓐ 嘉吉三年　身延山所蔵本尊の筆者

行学朝師真蹟とされる当本尊を前項の行学朝師真蹟ⒸⒹ二本尊と比較してその特徴の差を明らかにし、次いで本果朝師真蹟本尊類と比較し真の筆者を検証してみたい。写真によれば当本尊は本紙に欠損部分があり特に右端に多いが文字の特徴をはじめ各部分は十分に比較考察が可能である。

(a)首題の書写の特徴

首題の文字は素朴で骨太、流麗ではなく文字は大きくないが力強い。「蓮」の筆法、「經」の筆法は正に本果朝師真蹟に見られる特徴が出ており東之坊所蔵本尊と同様である。(一四八頁写真参照)

(b)勧請諸尊の表記の特徴

十界の諸尊が勧請される。首題の下に「南無日蓮大聖尊」と大きく書写され朝師の筆法である。四天王、二明王も明記され、不動、愛染の梵字は正に享徳二年立正寺所蔵本尊以降の特徴を具える。

(c)讃文の引用、経文の特徴

首題右の讃文は右上より「讃□□福於安明謗者開罪於無間」その下中程に「若悩乱者頭破七分」その下に「佛滅度後二千二百三十余年□□□□浮提之内未曽有之大漫荼羅也」とある。

首題の左の讃文は左上より「照生死長夜大燈明切元品無明利劔」その下、中程に「諸餘怨敵皆悉摧滅」その

左へ「有供養者福□十号」とあり、宗祖真蹟、二十八紙大漫荼羅はじめ光長寺日法師真蹟本尊に見られる讃文である。但「照生死長夜……利劔」までの讃文の他例は未見。

(d)署名、花押の特徴

首題の中心線真下に小さく「沙門□朝花押」がある。「沙門」の文字は他例もあり蓮静寺蔵写本、本果朝師筆蹟と同様である。花押と「朝」の文字は重なりが多い。

行学朝師花押は右下部分が「ᔕ」の如く垂直に下に延びるが当本尊の花押は「ᔕ」の如く大きく膨らむ。これは本果朝師の特徴である。(一四七頁写真参照)

(e)授与者、年記の特徴

署名花押の左側に「良壽丸　授与之」とある。「良壽丸」が如何なる人物か特定できないが「松子丸、亀壽丸」は他の本果朝師本尊及び日建師本尊表記により「本立正寺」在住の子弟又は修行僧と見られ、「良壽丸」も或いは本果朝師学室の子弟の名前の可能性はあると言えよう。右端下には異筆で「桂□□礼五郎右衛門吉次」とあるが後の加筆であろう。

年記は「嘉吉三年大才癸亥六月二日」(一四四三)と本尊左端の下部に記される。

(f)文字の特徴

「南無」「蓮」、そして「經」の字は糸偏の第一角の丸みが特徴。「薩」「羅」「日」「月」もそれぞれ独特の筆法であり、署名花押も本果朝師の特徴が明らかである。これらを比較例示する。(一四八頁写真参照)

されば当本尊は(a)～(f)の比較検討により行学朝師真蹟とは言えず、本果朝師真蹟と判断されるものである。

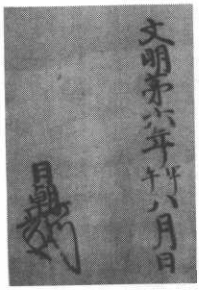
本果朝師の典型が現われ始める享徳二年（一四五三）本尊より十年以前に書写されたもので、讃文の一部に他例にない一節があるものの本尊自体特徴を具備する。首題の文字が本尊中やゝ小さく感ぜられるが文字の特徴も一致し本果朝師真蹟として新たに認識すべきと考える。

行学院日朝聖人花押

文明三年
三島本覚寺本尊

文明四年
京都妙伝寺本尊

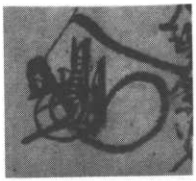
文明六年
三島本覚寺文書



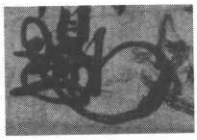
三島本覚寺文書

本果院日朝聖人花押

享徳二年
立正寺本尊

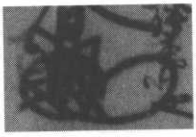


享徳三年
蓮静寺本尊



享徳四年
蓮静寺本尊

長禄四年
東之坊本尊



Ⓐ嘉吉三年　身延山本尊

南無

蓮

經

薩

羅

月

日蓮

花押　署名

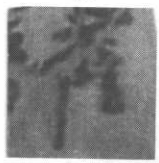
享徳二年　立正寺本尊

南無

蓮

經

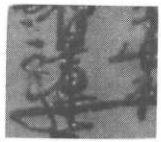
薩



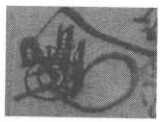
羅

月

日蓮



花押　署名



㈡ Ⓑ 永享八年　富士市妙永寺所蔵本尊の筆者

富士市妙永寺所蔵本尊も前項の行学朝師真蹟本尊ⒸⒹの例示と比較し、各部分に於て異なる点が見える。一方、光長寺系統の本尊とは判断されるものの直ちに本果朝師真蹟と断ずる前には以下の検討が必要となろう。

(a)首題の書写の特徴

首題の文字は大きく筆勢がある。ただし文字は骨太の感はなく抑揚があり素朴の印象もない。行学朝師のような流麗さ、軽やかさも認められない。

「蓮」「經」の文字は殊に大きく書かれるが本果朝師の特徴は具備していない。（一五一頁写真参照）

(b)勧請諸尊表記の特徴

上段仏部が首題の左右二行ずつに記され、中段には右に「文殊普賢大士」その右に「鬼子母神」首題の左に「薬王弥勒尊」その左に「十羅刹女」、首題の下に「日蓮大士」その右脇に「日春上人」その右に讃文を狭み、「天台傳教師」、「日蓮大士」の左脇は「日法上人」その左に讃文、その左は「三十番神尊」である。四天王、二明王が表記されるが「天玉」の文字及び、不動、愛染の梵字の書法が本果朝師の真蹟例と異なる。勧請諸尊の表記、書法は前例二項㈢の本国寺所蔵本尊と同様である。（一五〇頁写真参照）

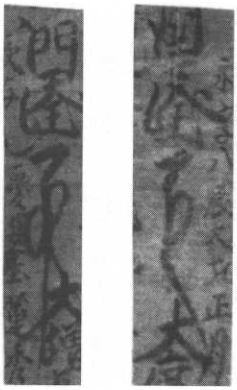
(c)讃文の引用、経文の特徴

讃文は右「日春上人」の右脇に「末法相應之」とあり、左「日法上人」の左脇に「大漫荼羅也」とある。同文の他例で見ると南之坊所蔵の永享元年の本尊、本国寺所蔵の永享九年の本尊と同様である。

(d)署名花押の特徴

不動　愛染表記

Ⓑ永享八年妙永寺本尊



享徳二年立正寺本尊

永享九年本国寺本尊

「日蓮大士」の文字の下に「日朝花押」がある。署名の「日朝」は明瞭で「朝」と花押は重ならない。行学朝師の花押とは全く異なり、本果朝師花押とは形状が類似するものの筆法にやや異和感がある。

(e)授与者、年記の特徴

授与者は本尊左端中程より「授与之　優婆塞蓮秀日仁」と見え、二項㈢本国寺本尊同位置には「授与之　優婆塞蓮壽日堅」と記される。他面に於いても、永享九年本国寺本尊と類似点が多く両本尊の筆者は同一者と見て間違いはない。但し、本果朝師真蹟であるとの意味ではない。

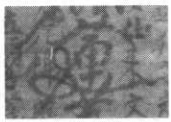
本尊の右端上部より「永享八辰太才正月佛誕日」とあり、本国寺本尊の同位置には「永享九丁巳太歳正月佛誕日」とある。筆蹟は同人のものである。ただ本果朝師の年記の書写の位置は本尊左端下であり「年」や「干支」の文字の欠ける点も疑問が残る。

(f)文字の特徴

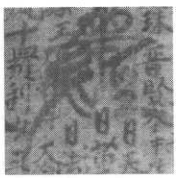
Ⓑ永享八年　富士市妙永寺本尊

南無

蓮

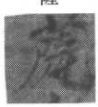


經

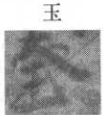


羅

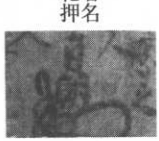
薩



玉



花署
押名



享徳二年立正寺本尊

南無

蓮

經

羅

薩

玉

花署
押名

永享八年蓮華寺本尊

南無

蓮

經

羅

薩

玉

花署
押名

当本尊の文字比較に於いて、行学朝師と明らかに異なる特徴を見る。それは「無」「蓮」「經」「薩」「署名花押」の書式を見ても明らかである。然し、これらの文字が本果朝師の典型的な筆法の文字、例えば立正寺所蔵本尊と比較して同様の特徴を有しているかと見れば、「蓮」「經」「羅」「薩」「玉」「署名花押」「二明王」等に異なる特徴が見える。書写された年代の同じ蓮華寺所蔵の本尊と比べても差異が見られる。それらを図示して見た。（一五一頁写真参照）

以上の(a)～(f)の比較検討により当本尊Ⓑは行学朝師真蹟とは言えない。一方、本果朝師ご在世中の年代表記がある事に間違いはないが本果朝師真蹟であるとは断定できない。本国寺所蔵本尊とほぼ同じ形式であるものの典型的本果朝師真蹟の他例と比較しても同師の同年書写の蓮華寺所蔵本尊と比較しても特徴の異なる点が見出される。これは大きな課題である。真蹟本尊には聖人の醸し出す気骨や独得の雰囲気が現れているように感ぜられ更に具体的に研究を続けさせて頂きたい。

五、結語

本果朝師の真蹟本尊類につき個々の特徴を挙げ比較概観して今日に伝承される本尊が如何なる位置にあるかを考察して来た。また新たに二本尊の調査結果も示しその筆者も考察した。

特に甲駿（山梨県、静岡県）をその布教の拠点として活躍され「東朝西隆」の「東朝」と称される本果朝師。その根拠は休息立正寺、己心院日退師により宝永三年（一七〇六）に著された『甲陽休息山立正寺之來歴』に記されており、「中興日朝光長寺ノ職ヲ兼ネ兩寺悉ク建立スル也　然ルニ日朝盛ンニ本勝迹劣之義ヲ宣ベテ洛陽本

能寺開基日隆ト一味同心シテ東西ニ弘通ス　朝ハ東隆ハ西　互ニ諾シテ」と見える。

なお『仏祖統紀』の「日隆上人傳」に「本果院日朝ナルモノ甲州立正寺駿州光長寺両山ノ主也」とあり「西隆東朝」の呼称が引用されている。[16] しかし決して朝師を称える伝記ではない。『統紀』は日退師の『來歴』より後年に著されたもので、六牙院日潮師は休息立正寺に滞在しその記録文書を残しており日退師の『來歴』を閲覧している可能性が強い。日退師の記録は当時存在した古文書を広く求め真偽を考慮して取捨しており客観的で信憑性がより高いと考えられる。その記録を辿れば立正寺が天正十年（一五八二）炎上した折重宝が失われた事が明記される。その後、復興のために苦境に立たされ立正寺十三世日定師の代に一致派（身延）に帰伏し当初「一本寺」（本山）の格式を以て待遇された。しかしその後慶長七年（一六〇二）十四世日應師の代には延山の末寺格となった。更に元和年中再び火炎に見舞われ当寺は焼失、延山に再び援助を求むる所となるが「一本寺」の格式は保つべく要望した事が記される。光長寺門流と分裂し、甲駿の勝劣派との確執はこの時更に続いており、光長寺末寺として存続する小林の立正寺[17]との軋轢は想像以上のものがあった事が記されている。

即ち今日、本果朝師の御本尊等の伝来が必ずしも多くないと判ぜられる理由の一つとして戦火、火災による焼失の原因は当然であるが今一つは八品門流、東の旗手として布教に当った歴史上の活動によると思われる。即ち同師に関連する本尊類、著述類、写本類は本果朝師歿後五代に亘り尊崇伝承されたが伽藍炎上の後立正寺自体が大きな方向転換をして終った。従って同師の学室の子弟多数の伝承文物も危機的状況となり本末各坊支院の文献も多く散逸したものと思われる。特に甲斐国の対立派には忌避され江戸期以来長期に亘って広範に失われて行ったのではないかと想像されるのである。

現に本果朝師の真蹟本尊、写本類は駿河（静岡県）側に多く伝来し光長寺末寺所蔵が殆どである。

されば平成二十七年、大本山光長寺に於て五百五十遠忌が修せられる本果朝師の真蹟は聖人の実像を拝するために貴重な存在であり、今後の新出資料も期待される所である。重要な歴史の空白を埋めるためにも更なる研究が必要な事を痛感しつつ稿を閉じ貴重なご本尊類の写真掲出を了解下された各寺院様に厚く御礼申上げます。

合掌

註

(1)「定輪寺文書」(静岡県史料1)『角川日本地名大辞典22静岡県』昭和五五年　五五〇頁

(2)「併和氏古文書」(神奈川県史料3下)前掲書　八六五頁

(3)駿東郡のうち相模国荻野山中藩のうち旗本山岡氏領、明治元年駿府藩領となり明治四年静岡県に所属、明治二十二年北郷村の大字となる。前掲書　七二頁

(4)『甲陽休息山立正寺之來歴』己心院日退記、宝永三年五月記

(5)『桂林学叢』第二三号拙稿「本果院日朝聖人に関する研究(三)　七五頁

(6)『興隆学林紀要』一号拙稿「本果院日朝聖人に関する研究(一)　四六頁

(7)蓮静寺第二世　延徳三辛亥七月十六日遷化(同寺過去帳)

(8)蓮静寺第三世　永正六己巳三月十六日遷化(同寺過去帳)

(9)『夫木抄』＝(夫木和歌抄)延慶三年頃成立、三六巻　藤原長清撰

(10)和歌「はるはると甲斐の高根はみえかくれ板野の小菅すえなひくなり」

(11)『甲斐国社記・寺記』第二巻寺院編一、一一頁
(12)『角川地名大辞典』19山梨県　三八六頁
(13)『日蓮聖人門下歴代大曼荼羅本尊集成解説』昭和六一年　四二頁
(14)『桂林学叢』第二三号拙稿「本果院日朝聖人に関する研究（三）」六七、九三頁
(15)『桂林学叢』第一五号拙稿「日法聖人文書の研究(一)」一四八頁
(16)『本化別頭佛祖統紀』諸山總列傳「京兆本能寺開山日隆上人傳」本山本満寺　昭和五五年　三八一頁
(17)今日の甲州市勝沼、山、安国山立正寺（光長寺末寺）

〈キーワード〉　本果院日朝　行学院日朝　日隆　東朝西隆　八品門流